



注文の多い料理店（I）

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたとこを、こんなことを云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここらの山は怪しからんね。鳥も獸も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早く



注文の多い料理店（2）

タンターンと、やって見たいも
んだなあ。」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、
二三発お見舞いもうしたら、ずい
ぶん痛快だろうねえ。くるくるま
わって、それからどたっと倒れる
だろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案
内してきた専門の鉄砲打ちも、ち
ょっとまごついて、どこかへ行っ



注文の多い料理店（3）

てしまつたくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちょっとかえしてみて言いました。



注文の多い料理店 (4)

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、もひとりが、くやしそうに、
あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを
悪くして、じっと、もひとりの紳
士の、顔つきを見ながら云いまし
た。

「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはな
ったし腹は空いてきたし戻ろうと



注文の多い料理店（5）

おもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。

なあに戻りに、昨日の宿屋で、山

鳥を拾円も買って帰ればいい。」

「兎もでていたねえ。そうすれば

結局おんなじこった。では帰ろう

じゃないか」

つづく